

卒業生の皆さんへ

清田啓子

本年三月末日退職しますにあたり、卒業生諸姉のご健康と人生の充実を心からお祈りいたします。三十年以上の間、有意義な時を共に創る喜びを経験することが出来、感謝しております。

短大国文科の同窓会も今は「すみれ会」と名が定まり、幹事さんの熱意と皆さんの協力で発展しつつあることは喜ばしい限りです。

以前、主任であつた時の同窓会へのメッセージをここに再録させていただきます、お別れのご挨拶といたします。

例年になく梅雨入りがおそく、夏のような陽さしの中、大学は活気にあふれています。

久しぶりに、同窓会の皆さんからたくさんのお便りが届き、うれしく拝見しました。

なつかしいお名前も多く、その御苗字の変つた方もあつて、奥さまぶりが想像されます。また、職場では、

すでに中堅となられた方、新進気鋭、いきごみさぞやと思われる方、さまざまの活躍ぶりがわかり、たのしい限りです。

さて、卒業生にとつて母校とは何なのでしょう。思い出のよすがとなる「過去の存在」にすぎないのでしようか。こう問いかけてみて、この問いは、私たちこの大学に属している人間にとつても重要なことだと、今、気がつきました。こんなふうに考えたからです。

皆さんが個々の日常生活の場で——例えば夕食後、食器洗いをしながら、ふと、この洗剤が地球をどのように変えてしまうのかと考えた時——つまり、日常の具体の中で、思いが抽象に至る時、「大学」はその思惟を支えるものとして機能するのではないかと、もしそうとすれば、「大学」を本質的に充実させるのが私たちの務めでなければなりません。

これは私の自問自答です。皆さんがどうお考えか、うかがいたいと思っております。

皆さんが母校をどういうものと考えるかが在学生や教員によき刺激を与え、内実を高めて行くことでしょう。

今年から、同窓会の会合ももてそうです。多くの方にお目にかかれまますようお願いしております。

(一九八六年六月)